会誌「蹤」に寄せて～ウサギとカメのその後

鶴居村教育委員会教育長　　村上明寛

原稿依頼をいただいたときに、私はてっきり「樅」だと思い、樅→クリスマスツリー→マッチ売りの少女→白昼夢→バーチャル→ＡＩと連想し、読解力の話でも書こうかと思ったら、「樅」ではなく「蹤」と気づき、蹤→足跡→振り返り→改善という新たな連想のもと「ウサギとカメのその後」について書くことにしました。アンデルセンからイソップへの方向転換です。

「ウサギとカメのその後」というのは、以前、Ｓ－ＰＬＡＮＥＴという人材育成セミナーを主宰する会社のメルマガで読んだ話です。「ウサギとカメ」自体は、皆さんご存じのイソップ寓話で、足の速いウサギと足の遅いカメが競争し、カメが勝つ話。教訓としては「思い上がり油断すると物事を逃してしまう」、「実直に打ち込むと大きな成果を得ることができる」といったところでしょうか。

メルマガに書かれていた「ウサギとカメのその後」はこうです。「競争に負けたウサギは仲間からもバカにされ、失意のどん底です。しかし元々負けず嫌いで頭の良いウサギは、この経験をリフレーミングするのです。そう、捉え方を変えて今後に活かすことを思いつきました。さっそく自分よりも力があるライオンやトラに近づき、強みと弱みを徹底的に研究しました。いろんな情報を収集し、周りの仲間にも声をかけ、一緒に目的を共有しました。つまりカメに負けた時の反省は、勝って当たり前という「傲り」と自己中心的な考えでした。その傲りが努力を放棄したのです。結果誰もが恐れるライオンとトラの信頼を得て、ウインウインの関係を構築できました。逆にカメは…、その後もただひたすら同じことをやり続けてしまったため、主体的に考えることをしなくなりました。誰かに指示されない限り、動かなくなってしまったのです。」

なるほど、大きな失敗をしたウサギは、反省をもとに意識を改め、情報収集や仲間との意見交換を経て自己改善に努め、信頼回復に結び付けた。一方、カメはただひたすらにゴールを目指したことだけで大きな成果を得たことから、前例踏襲を繰り返し、主体性を失い前に進むことさえできなくなった。ということで、ウサギのリフレーミングつまりウサギが自身を今までとは違った視点から捉えることで、自身をポジティブに変革させていくことができたということをこのメルマガは示唆してくれました。

では私はカメのリフレーミングを。カメも当然気づいていました。ウサギに勝てたのは自分の力ではないことを。他のカメと同じように自分ができることをしただけなのに、たまたま与えられた条件が良かっただけだということを。でも、思わぬ結果がついてきたものだから、ウサギに勝ったという大きな成果は独り歩きし、周囲から賞賛され、どうして勝てたのですか？どういう訓練をしているのですか？何か特別なことをしているのですか？と注目の的になってしまい困惑気味。でも、本当は条件が良かっただけですとは言えません。だから胸をはって、他人との比較ではなく自分のベストを尽くしたのです。当たり前のことをきちんと行っていれば結果はついてきます。これからもこのスタイルで頑張ります。と答えざるを得ません。やがて、今のスタイルで成果を上げているのだから変える必要はないと信じ込んでいきました。では、カメはどうすべきだったのか…。前例踏襲はすべてが悪いことではありません。良い前例は伝統となり、後世に受け継がれるものです。一方で、このままでよいのか？環境の良さを活かして、一層の成果をあげるためには何が必要か？という検証も必要です。走りこんで持久力に磨きをかけるとか、動きにメリハリをつけてモチベーションを維持するとか、仲間と連携・協働しキャリアを積み上げるとか、スキルアップのために外部の意見を聞くとか、カメにもそういう努力が必要だったのでしょう。

皆さんは、どのような後日談を想像しますか。くれぐれもツルがカメにならないように。